

# くらしの中で読む『正法眼藏』

おうさくせんだば  
王索仙陀婆の巻 その五

成興寺住職 小倉玄照

## 香嚴の指導

香嚴<sup>きょうげん</sup>襲<sup>しゆう</sup>燈<sup>とう</sup>大師、因みに僧問ふ、

「如何なるか是れ王索仙陀婆」

厳云く、

「這辺<sup>しあわへん</sup>を過ぎ来れ」

僧、過ぎ去く。嚴云く、

「純置殺人」

しばらくとふ、香嚴道底の「這辺を過ぎ来れ」

これ索仙陀婆なりや。試みに請ふ道へ看ん。ち

なみに僧過這辺去せる、香嚴の索底<sup>さきて</sup>なりや、香嚴の奉底<sup>ぶてい</sup>なりや、香嚴の本期<sup>ほんこ</sup>なりや。もし本期にあらずば、鈍置殺人といふべからず、もし本期ならば、鈍置殺人なるべからず。香嚴一期の尽力道底なりといへども、いまだ喪身失命をまぬかれず。たとへばこれ、敗軍之將さらニ武勇をかたる。おほよそ説黃道黒、頂顙眼睛、おのれづから仙陀婆の索奉、審番細細なり、拈拄杖<sup>ねんしゆじょう</sup>、拳<sup>こぶし</sup>子<sup>こぶし</sup>、たれかしらんといひぬべし。しかあれども、膠柱調絃するともがらの分上にあらず。

このともがら、膠柱調絃をしらざるがゆゑに、  
分上にあらざるなり。

△現代語私訳△

香嚴襲燈大師に、あるとき、一人の僧が問うた。

「王が仙陀婆を索める、とはいつたいどうい  
うことでしようか」

香嚴は言つた

「そこをちよつとよけて貰えぬか」

僧は、向うへ行つた。香嚴は云つた。

「とんまなことよ、ひどいもんだ」

ひとまずみなに問うてみよう。香嚴が言つた

「そこをちよつとよけて貰えぬか」というのは、

これは索仙陀婆なのか、奉仙陀婆なのか。さあ、

ちよつと答えてごらんなさい。ついでに、僧が

行つてしまつたのは、香嚴がもとめたものか、

香嚴がしかけたものか、或いは香嚴のもともと

のねらいであつたのだろうか。もしそれをねら

概念碎き

香嚴襲灯大師は、香嚴智闇（？—一八九八）の

つていたのなら、とんまなことよ、ひどいもん  
だ、などとは言うまい。香嚴の一生をかけ、全  
力尽して語つたものではあるが、まだ性根が坐  
つてゐるとは言えない。いつてみれば、敗軍の  
将がこと新しく武勇を語るようなもの。そもそも  
も、黄とか黒とか、さまざまに説いたり言つた  
りして來た仏祖がたは、おのずから仙陀婆をも  
とめたり、奉つたりで、それはまこと微にいり  
細にわたつてゐる。拄杖じゆじょうを拈ねんじ、払子ほっすをあげる、  
そういうやり方を知らぬ者はない。しかしながら  
琴柱ことじゆをにかわづけにして絃を調えるような融  
通のきかない連中の分際とは違う。この連中は、  
琴柱をにかわづけにして絃を調えるということ  
がいつたいどういう結果を招くかを知らないの  
だから、とてもその分際とは言えないのである。

こと。百丈懷海（七四九—八一四）について出家し、のち渦山靈祐（七七一—八五三）に参じ、結局その法を嗣ぎました。まだ渦山から許されぬころ、南陽の武当山に入つて庵に独居していましたが、ある日、庭で掃除中、小石がはね飛んで竹を撃ち、その響を聞いて忽然として大悟したという話はよく知られています。

さてその香嚴智閑大師に、一人の僧が「王索仙陀婆」とは何かを尋ねました。そもそも「王索仙陀婆」というのは勘の問題ですからことばでそれを説明してみてもどうなるものでもありません。

そこで香嚴は、あえて概念碎きに出ます。現実生活からすつかり遊離してしまつた概念的思考に凝り固まつてゐる僧に対しては、具体的な行動を求めることが何よりも肝腎なことです。「そこをちょっとよけて貰えぬか」

「過這辺來」は、もつと他に訳し方があるの

かもしません。「もつとこつちへおいで」と、増谷文雄氏は訳しています。あつちがこつちになつても、来いでも行けでも、そのあたりのニュアンスは、どつちへどう転んでも大したことはありません。要は、僧の間に對して、理づめの答はしなかつたという点に注意を払う必要があるのです。

はたして、思考と行動が分離してしまつてゐた僧は、香嚴の意表をついた答にうろたえてしまいました。考へてみれば、彼は、問を発する時点でも、自分中心の概念の世界におぼれてしまつていたのでしよう。質問の相手である香嚴がその時、どんな思ひでいるかまで気配りをしながら問を發するような男なら香嚴も「そこをちょっとよけて貰えぬか」などとは言いますまいし、もしそう言われてもとつさにそのときどう行動すべきかは判断できたはずのものなのです。

もちろん、これは、問をしかけた一人の僧についてことを考えた場合です。

### 対機説法

道元禅師は、指導者側の香巖の方にも問題があると仰せです。なぜか。実は、指導者というのは、指導を乞うている相手の人間の器量や勘の働き工合を或る程度把握しておらなければならぬのです。

仏教では、古くから「対機説法」とか「応病与薬」とかいうことを大切に考えて来ました。

「対機説法」は、教えを聞く人の能力や素質に応じて法を説くことを言います。「応病与薬」は、そのことを病に応じて薬を与えるようなもの

だ、と比喩的に表現したものです。もちろん、禅門でも昔からそれは当然のこととされていました。例えば、『碧巖録』の第四則の冒頭の「垂示」には、

「青天白日、更に東を指し西を劃すべからず。時節因縁、亦須らく病に応じて薬を与ふべし。しばらく道え、放行するが好よ、把定するが好きか。云々」

とあります。まつ青な空に、太陽が輝く大空を、東の部分、西の部分とはつきり区分けすることは出来ないし、してみたところで意味もない。師家（禅の指導者）もそれと同じだというのです。つまり、指導の型というものはないのであって、時により、相手によつて臨機應変でなければならぬ。相手の自由に任せるか、徹底して我がままを封じ込んで管理するか、それは時に応じて師家が判断しなければならない——

このごろの学校教育などでは、こういう対機説法とか応病与薬とかいった考え方がどうも忘れられているのではないかという気がします。生活は便利至極になり、ものはあふれている



感じの現代は、教育にとつて決していい環境ではありません。しかし、先生方もまたそういう環境の中に知らずしらずの内に浸かりきつてしまっているのだということを忘れてはいるのではないかということが気になります。生徒がいうことを聞かないと言つては嘆き、親も親だと言つてはぶつくさ言つてはいる教師が多いのですが、教育のプロなのですから、グチばかり言つていては始まらないと私は思います。親も親だ、と思われる家庭に育つた生徒には、それ相応の的確な対応をしてやるのが教師ではありませんか。そのことがほとんど顧みられず、生徒心得に合つた行動をしているかどうか、といった表面的なことのみでしか生徒を評価できない教師が多くなつてゐるよう思えてなりません。マニユアルでは、生徒の指導は出来ないはずなのです。常に生徒一人ひとりの個性をしつかりと把握して相手次第の対応をするのがほんとうの教

育者なのです。もし、親や家庭に問題があるのなら、親に対して的確なてだてを講じなければならないのであって、「困った親だからどうにもならんよ」と嘆いてはいるだけでは話にならないのです。

「膠柱調絃」というのは、マニュアルにのみたよつてする硬直化した指導のありようを象徴しているのだと考えてよいでしょう。もし香嚴のやり方がマニュアル化してしまったら、これは危いことです。教育というのは、もつと自在なものであるはずだ、と道元禅師は仰せです。

### 指導者の独善性

今ひとつ香嚴のやり方には問題が秘められています。指導者が陥りやすい自己中心的な独善性に関するこことについてです。指導者は自らの指導の失敗については、それを謙虚に認めて反省をする度量がいるのです。

道元禅師は、香巣の発したことばを正しく受けとめられずに向うへ行つてしまつた僧について、単に僧ののろまさの所為とだけ片づけてしまふわけにもいくまい。ここは、指導者側の香巣にも対応の仕方がその僧に最もふさわしいものではなかつたかもしれないという反省が必要ではないのか——と言われるのです。

もちろん、教育には完璧の指導法はありません。失敗を重ねながら、指導者は力量を身につけて行くわけですが、最近の若い親御さんと関わつての印象では、どうも子育てについての親の対応の悪さを反省しようとしてない傾向が気になります。自分は、おおむね間違つたことはしていなといいう自我肥大のきらいの強い親たちが多くなつたのです。我が子の欠陥すら素直には認められない親が多いのです。それを認めることは、自分の子育ての欠陥を認めることがありますからだ、と私は思つています。

こういう自我肥大にもとづく、自分は完全無欠であるという思い込みは、学校教師には特に顕著なのではないかと私は思つています。短大を出たての若い保母さんたちが、子供に対した途端に、先生づらをして命令口調でいっぱいの口をきくのは苦々しい限りです。私はいつも彼女たちに、子供から学ぶ謙虚な姿勢がないと、一人前の保母さんとは言えませんよ、と言つているのですが、現代人がどうしてみなこういう「全能感」にばかりなるのか考えてみなければならない大問題だと思つています。

香巣に象徴されている禅の指導者も、そういう完全人間になつてしまいやすい傾向があるから充分注意しろ、というのが道元禅師のご注意なのでしょう。もちろん、完全人間になつてしまえば、勘もにぶつてしまふのは、これは当然なことです。